

授業分析について

柳瀬 陽介 (やなせ ようすけ)
広島大学大学院教育学研究科
ホームページ「英語教育の哲学的探究」
<http://ha2.seikyuu.ne.jp/home/yanase/>

1 言語コミュニケーション力の理論

言語コミュニケーション力(communicative language ability)
= 能力(competence) + 対応力(capacity)

「言語」(language)と「言語使用」(language use)

例「あなたは何歳ですか?」「あなたのお子さんは何歳ですか?」
「あなたは男性ですか?」

「文法」(grammar)と「語用論」(pragmatics)

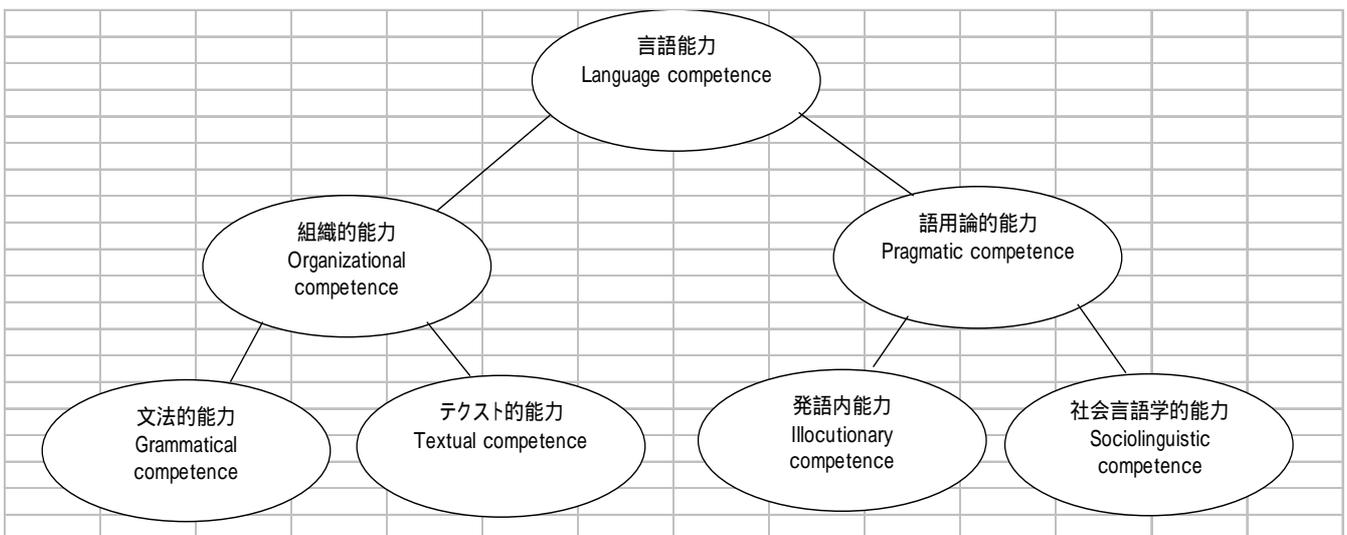
「文字通りの意味」(literal meaning)と「話者の意味」(speaker meaning)

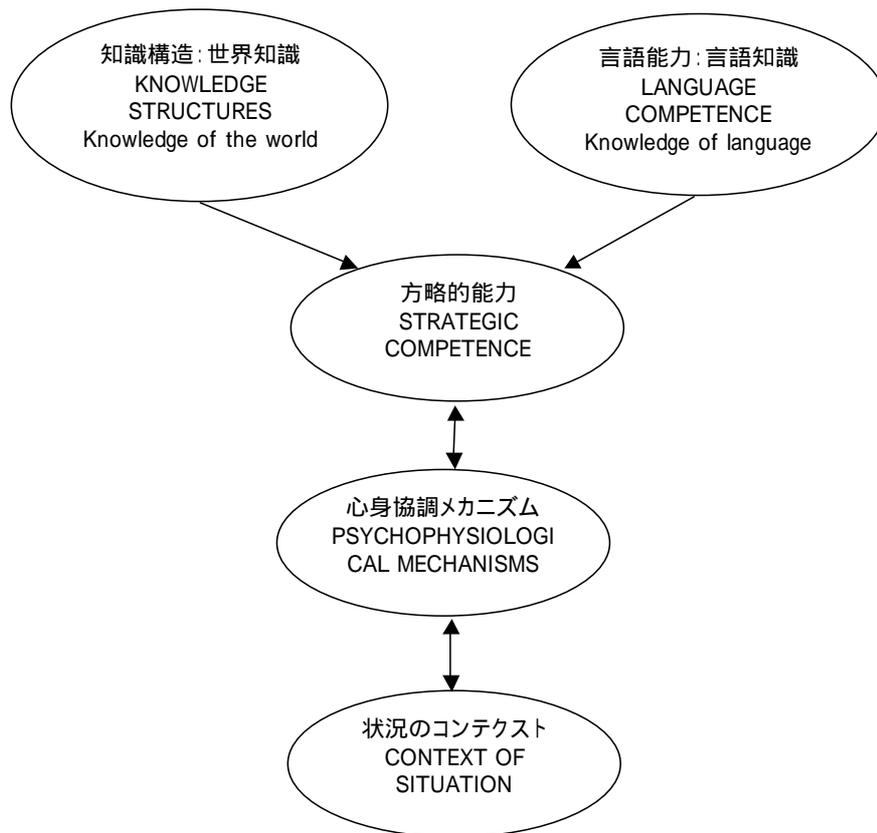
例「かわいいお嬢さんがいるんだってなあ」

「能力」(competence)と「対応力」(capacity)

能力とは、定型的な表現を適用すること。訓練(training)で伸ばす。

対応力とは、能力を活用すること。教育(education)で伸ばす。





バックマン(1990)の言語コミュニケーション力の考え

2 DVD 視聴と討議

それぞれの DVD (6-Way Street) から皆さんは何に気づきますか? メモを取って、そのメモをもとに討議してみましょう。

(1)久保野雅史先生「読む・書く活動の指導と評価(2)」実践(上巻、その2): 約 15 分

(2)蒔田守先生「聞く・話す活動の指導と評価」実践(上巻、その1): 約 15 分

(3)蒔田守先生「読む・書く活動の指導と評価」実践(上巻、その2): 約 20 分

参考文献

Bachman, L. 1990. *Fundamental considerations in language testing*.

Oxford University Press

Widdowson, H. G. 1983. *Learning purpose and language use* Oxford University Press.

田中武夫・田中知聡 2003. 『「自己表現活動」を取り入れた英語授業』大修館書店

実践研究について

柳瀬 陽介 (やなせ ようすけ)

広島大学大学院教育学研究科

ホームページ「英語教育の哲学的探究」

<http://ha2.seikyuu.ne.jp/home/yanase/>

1 「実践」とは

1.1 単一の因果関係だけから実践を考える危険について

今、日本で人気の市井の哲学者、内田樹(<http://blog.tatsuru.com/>)の言葉を聴いてみよう。

他罰的な説明をする人って、言い換えると「ペニー=ガム法」で物事を考える人なんですよ。自動販売機にペニー硬貨を入れてガムが出てくると、「ペニーがガムに変化した」と考える人。自分が不幸な目に遭うと、この不幸という「ガム」に対しては原因として「ペニー」が一つあるはずであると考え人。これがシンプルな思考をする人のパターンです。

1.2 実践の構造について

教育学にも大きな影響を与えた哲学者ドナルド・ショーンの実践に関する考えを検討しよう。<http://www.infed.org/thinkers/et-schon.htm>

・「技術的合理性」(Technical Rationality)とは、問題を狭く限定し、その問題空間の中で、ある特定の目的を達成する最も効率のよい手段を見つける知性の働かせ方であるが、そういった「技術的合理性」による単数の問題解決から、「行為内省察」(reflection-in-action)による複数の問題発見・設定へ。

・「行為内省察」(reflection-in-action)とは、実践者が、「状況との対話」(conversation with the situation)により、とにかく自分が解けそうな問題を発見・設定し、さらには自分が設定した問題を理解し、またそれを変革し、その結果を(予想外の結果も含めて)全体的に肯定するか否定して、次の実践へとつなげてゆくこと。なおかつ double vision を持ち、自分の考え方とは全く異なる考え方もありうることを常に意識していくこと。

・実践とは、行為内省察に導かれ、問題解決と問題設定・発見を繰り返す、一連の行為である。実践者は、自らの認識で状況をとらえ、状況との対話でそれを修正し続ける。実践は複雑性、不確実性、不安定性、独自性、価値葛藤と共にあり、実践者は問題を完全解決せずに manage する。

2 研究とは

2.1 科学的アプローチと哲学的アプローチ

20 世紀に最も影響力のあった女性知識人であるハンナ・アレントのまとめを検討しよう。

(カントに基づく)アレントの cognition と thinking の区別

Cognition (認知すること/調べること)	Thinking (考えること)
Intellect (知性)	Reason(理性)
truth (真理)	meaning (意味)
知覚的証拠によって決定	議論によって探究
science (科学)	philosophy (哲学)
answerable question (答えられる問い)	unanswerable problem (答えられない問題)
コンピュータによって代替可能	コンピュータでは不可能

2.2 実践の現実にとっての理論の役割

再び、哲学者内田樹の(実践的治療者池上六朗との対談の)言葉に耳を傾けよう。

内田：池上先生がおもしろがっているのは、ソーシャルにしてもレヴィ=ストロースにしてもラカンにしても、さっきの話のように、非常にぐちゃぐちゃとした現実から、一つの理論モデルを抽出してきて、みごとに現実を説明してみせる。でも、そういう力業をやっておきながら、「それは仮説にしか過ぎない」ということを本人はよくわかっている。発想の底知れない自由と、知性の節度が同時に彼らには感じられるんですね。で、ぼくにはなんとなくわかるんです。そういう知性しか生き残らないんです。「これは正しい！永遠の真理だ」というようなことをおもっちゃうとね、ダメなんですよ。「これはただの仮説である。テンポラリーな説明である」と。これで当面は話の辻褄が合うけれど、先のことはわからないよ、と。(内田・池上 2005: 88-89)

3 実践研究とは

3.1 今までの議論から「実践研究」をまとめると

実践の複雑な状況を、実践者がどのように理解して、どう解きほぐし、どのように改善を図っていったかを、状況の中で記述・分析する試み。決してそれだけで完結することはなく、この実践研究がさらなる実践的な問いと試みを生み出してゆく。

3.2 実践研究の発表で大切なこと

「私には分からない」というのが、知性の基本的な構えであると思っているからである。「私には分からない」「だから調べる、考える」「なんだか分かったような気になった」「でも、なんだかますます分からなくなってきたような気もする……」と螺旋状態にぐるぐる回っているばかりで、どうにもあまりぱっとしないというのが知性のいちばん誠実な様態ではないかと私は思っているのである。

参考文献

- 内田樹(2003)『ためらいの倫理学』角川文庫
内田樹・池上六朗(2005)『身体の言い分』(毎日新聞社、1500円)
内田樹・春日武彦(2005)『健全な肉体に狂気は宿る』角川書店
ドナルド ショーン『専門家の知恵 反省的实践家は行為しながら考える』
Carr, W. and Kemmis, S. (1986) *Becoming Critical*. London: The Falmer Press.
Schön, D. (1983) *The Reflective Practitioner. How professionals think in action*
秋田 喜代美, 恒吉 僚子, 佐藤 学(2005)『教育研究のメソドロジー 学校参加型マインドへのいざない』東京大学出版会 お薦めです!!!

さらに参考までに

「外国語教育関係者が心理学とアクション・リサーチの方法論に親しむための7冊+」

<http://ha2.seikyoku.ne.jp/home/yanase/education.html#050405>